

吉川宏志歌集

『雪の偶然』

(現代短歌社)

作者の第九歌集。歴史の暗い部分や複雑な社会問題、死に関わる出来事などに果敢に切り込む歌が強い印象を残す。紫陽花はどんな壁にも凭れおり占領のながくながく続きて

紫陽花は本歌集に度々登場する。頭ばかり重そうで自立できない敗戦国日本を象徴しているかのようだ。

夕暮れの小部屋で顔は見えなかった 傷のような器官が俺を見ていた

「悪について」と副題のついた一連「人形器官」の一首。従軍慰安婦の置かれた異常な状況を、一人称の俺を通して描写する。人間の一部でありながら物として切り離された「器官」の痛々しさと、体制に抗えない兵士の無力さを想像上で追体験する凄まじさに、作者の勇氣と覚悟を見た。

プライベートに取材した秀歌も見逃せない。

隣室に「おんしゃ」「おんしゃ」と面接の練習しつつ 籠もる娘は

長女誕生の際の「乳と汗にじむからだを抱きとればわが胸にじっと貼りついていて」と合わせて読むと感慨深い。

表題は「氷雨降る 人をあきらめさせるため(偶然)」という言葉使いぬを含む一連から。雪が残る季節の被曝、雪中の戦死。受け入れ難い現実と重なる、雪の偶然だ。

(久保田智栄子)

池松舞歌集

『野球短歌』

(ナナロク社)

阪神タイガースファンの筆者が二〇二二シーズン全試合ごとにインターネット上で投稿した短歌を、1冊にまとめたのが本歌集だ。

ファンのむき出しの感情が歌に表れており、特に実際に観戦したと思われる歌では、字余り・字足らず・句跨りなど定型が崩れる傾向にあり、かえってその時の興奮や激情が露わとなっている。

春の夜に067が示すのは大阪の電話と阪神の勝率

オレンジの中央線に乗らないで黄色い総武線に乗ったのにな

良くも悪くも目立った選手が詠み込まれた歌も、数多く掲載されている。その選手を知っていると名前を見るだけでプレーする姿が頭に浮かび、短い固有名詞が表現の圧縮として活かしている。

こうやって、こうやって打った！とサテテルが身ぶり 手ぶりを交えて笑う

眞頂球団がある人には深すぎるほどの共感を呼ぶ具体性に溢れた、ヒットゾーンこそ限られるが当たれば確実に外野の頭を越えるホームランのような歌集だ。読み終わった後で球場へ行きたくなるからこそ、本書は『阪神短歌』ではなく『野球短歌』なのだろう。

(宮 梓一)